

「マリー・ローランサンの扇」

ピンク、グレー、淡いブルーを基調としたパステルカラーを用いて妖精のような少女たちを描いた画家、マリー・ローランサン。その作品の魅力は、彼女を取り巻く詩の世界と、扇に象徴されるパリのエレガンスに裏付けられています。日本の女性たちに圧倒的人気を誇るマリーの世界を、長野県蓼科高原にあるマリー・ローランサン美術館の所蔵品約 30 点によりご紹介いたします。

会 期	2010 年 1 月 26 日(火) - 3 月 28 日(日)
開館時間	午前 9 時 30 分 - 午後 5 時(入館は 4 時 30 分まで)
休 館 日	月曜日<ただし、3/22(月・祝)は開館、3/23(火)は閉館>
入 館 料	一般 1100 円 / 学生・65 歳以上 900 円 / 小中学生・高校生 500 円 ※コレクション展示含む
会 場	川村記念美術館(千葉県佐倉市坂戸 631 番地)
電 話	0120-498-130(代)
U R L	http://kawamura-museum.dic.co.jp
交 通	◎東関東自動車道「佐倉IC」から約 10 分、無料駐車場 300 台 ◎JR総武本線「佐倉駅」南口から無料送迎バス約 20 分 ◎京成本線「京成佐倉駅」南口シロタカメラ前から無料送迎バス約 30 分
主 催	川村記念美術館(DIC 株式会社)
後 援	千葉県 / 千葉県教育委員会 / 佐倉市 / 佐倉市教育委員会
協 力	マリー・ローランサン美術館 http://greencab.co.jp/laurencin/

.....<取材および追加資料請求のお問い合わせ先>.....

川村記念美術館 tel. 043-498-2672 / fax 043-498-2139

広報担当 海谷紀衣 norie-kaiya@ma.dic.co.jp

林里絵子 rieko-hayashi@ma.dic.co.jp

担当学芸員 横山由紀子 yukiko-yokoyama@ma.dic.co.jp

図版掲載には題名・制作年に加え、下記のクレジット表記が必要です。

(ただし、挿画本『扇』のみ©以下不要)

マリー・ローランサン美術館

© ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2009



《黒馬あるいは散策》1924 年
油彩、カンヴァス 98x79cm

概要

「死んだ女より哀れなのは、忘れられた女です」。この有名なフレーズで知られるように、画家マリー・ローランサン(1883-1956)は自ら詩を書き、多くの詩人と交流しました。1922年に友人たちがマリーに捧げるため出版した詩集には「扇」というタイトルが付けられています。エレガントでミステリアスな女性を想像させる扇は、マリー・ローランサンのシンボルとなっていたのです。

このことを知るとき、「扇」という言葉は「絵画と詩」「女性的な世界」の2つの次元において、マリー・ローランサンの世界を象徴するキーワードとしてとらえられます。マリーの絵画に漂う抒情性は、色彩と詩情の融合と呼ぶに相応しく、彼女が描き続けた世界は、まさに扇にたとえられるような優雅と洗練、魅惑に満ちた女性たちの夢の王国にほかならないからです。

本展ではマリー・ローランサン美術館のご協力により、青春時代から円熟期までの画家の歩みを、代表的な油彩画のほか、それぞれの時代に描かれた自画像、挿画本など33点の作品(川村記念美術館の収蔵品1点を含む)によってご紹介いたします。扇を広げてゆくと、閉じていたときには見えなかった美しい模様があらわれるように、出品作品を新しい感動とともにご覧いただければ幸いです。

関連プログラム

学芸員によるギャラリートーク

横山由紀子(川村記念美術館学芸員)

1/26(火)、2/20(土)、3/13(土)、いずれも

14:00-15:00

エントランスホール集合、先着40名

ガイドスタッフによる全館ガイドツアー

1/26、2/20、3/13を除く毎日14:00-15:00

エントランスホール集合、先着40名

会場混雑時にはコレクションのみのガイドとなる場合があります。



《ディアナ》1921年
油彩、カンヴァス 65x81cm

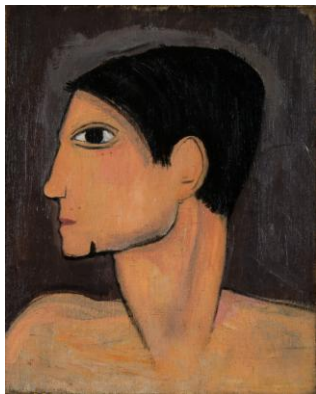
見どころ

人生と共にうつりかわる色彩

ピカソやマティスが活躍した 20 世紀初頭の芸術都市パリ。マリー・ローランサンは若き前衛芸術家の仲間にも囲まれ、その刺激的な環境の中でパステルカラーによる独自の絵画をつくりあげました。第一次世界大戦中のスペイン亡命、フランスへの帰国後の充実した制作活動を経て、ひたすら独自の世界を描き続けた円熟期に至るまで、マリーの絵画は、人生と共に変化してゆきます。本展では特にその色彩の変遷に注目しました。

1. 初期（1913 年まで）～パステルカラーの誕生

ピカソやブラックと知り合い、詩人アポリネールの恋人となったマリーは、前衛的芸術家のグループの一員として迎え入れられます。ブラウンを基調とした落ち着いた色調で描かれた作品群には、ピカソやブラックらの創始したキュビズムの影響や、またエジプト美術など古代、オリエントの芸術への傾倒もあらわれています。

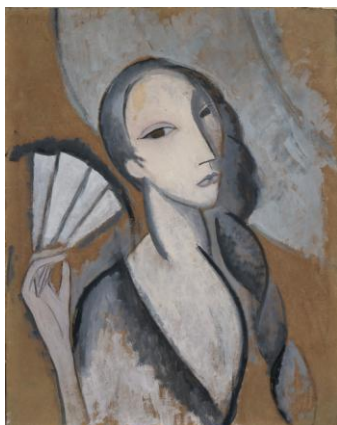


《パブロ・ピカソ》1908 年頃
油彩、カンヴァス 41x32.9cm



《狩りをするディアナ》1908 年
油彩、板 20.3x28.2cm

やがてマリーはキュビズムの手法による幾何学的な描線と、ピンク、グレー、淡いブルーを基調とするパステルカラーを融合させた独自のスタイルを確立します。国外にも作品が紹介されるなど、自立した女性画家として注目される存在となりました。



《扇》1911 年頃
油彩、板で補強した
カルトン
59x47cm



《アンドレ・グラー夫人ニコル
(旧姓ボワレ)》1913 年頃
油彩、カンヴァス
110x70cm

2. スペイン亡命時代（1914 - 1919 年）～憂いを帯びたパステルカラー

母の死、恋人アポリネールとの別れを経てドイツ人と結婚したマリーは、第一次世界大戦によって「敵国人の妻」となってしまい、中立国スペインで約 5 年間の亡命生活を送ります。親しい人との別離や苦悩を反映して、画面は深い色合いを帯び、また格子やカーテンなど「囚われの身」を象徴するモチーフが画面に描かれます。



《囚われの女(II)》1917 年
油彩、カルトン 20x13.7cm



《小舟》1920 年頃
油彩、カンヴァス 71.8x90cm

3. 帰国後（1920 年代）～「緑の森」と乙女たち

離婚によってフランス国籍を回復したマリーは生まれ育ったパリに戻り、孤独と不安から解放され充実した制作活動を送ります。友人たちがマリーを称える詩集『扇』を出版したのも、彼女の帰国を祝ってのことでした。帰国前に夫の故郷ドイツに滞在した経験を契機に、画面には「緑の森」を背景に遊ぶ少女たちが数多く描かれるようになります。優雅で官能の色を帯びたマリーの絵画は、戦後のパリの文化的・社会的状況を見事に表現しており、ココ・シャネルら社交界の名士がこぞって肖像画を注文するなど、華やかな成功の時代が訪れます。



《お城の生活》1925 年
油彩、カンヴァス 114.7x162.2cm



『扇』1922 年
挿画本 24.3x19.5cm

4. 円熟期（1930年代以降）～輝くパレット

再び戦争が訪れ、マリーは家政婦（後に養女）のシュザンヌと二人で静かな生活を送りながら、ひたすら美しい乙女たちを描き続けます。視力の衰えが進行する中、画面にはそれまでになかった明るく輝く色彩が置かれるようになり、パステルカラーのパレットには、若い頃には避けていた赤や黄色が加わりました。夢の世界に住む妖精のようだった少女たちは、次第に手脚のラインや顔の造形がはっきりとした女性像へと変貌してゆきます。



↑ 《三人の乙女》 1938年 油彩、カンヴァス 33x55cm

← 《アルルキーヌ(女道化師)または青い眼の少女》 1940年
油彩、カンヴァス 60.7x50.2cm

マリー・ローランサンと日本

スペインに亡命中のマリーと知り合いになった詩人・堀口大學は、後にマリーやアポリネールの詩を日本語に翻訳し、近代フランス詩集『月下の一群』として出版します。「死んだ女より哀れなのは、忘れられた女です」という有名な一節は、より忠実に訳すならば「私は死んでいるというより、忘れられているのです」となりますが、マリーを直接に知る大學ならではの名訳により、今日もなお多くの日本人の心に響き続けています。

「日本語から訳された、素晴らしい本がありました。『枕草子』というのです」とマリーは書き残しています。リセの頃にはルイ14世の愛妾たち(ファヴォリット)に憧れ、マリー・アントワネットを描いた女性画家ヴィージェル・ブランを愛したマリーは、鋭い感性で宮廷の雅な世界を描写した『枕草子』に自分と通じるものを感じたのでしょう。小説家・中村真一郎は、日本人がマリー・ローランサンを愛する理由のひとつとして「抒情的」という共通点をあげました。短歌(和歌)や俳句が日常生活の中にある日本人は、心のふるえや官能を優雅に洗練された形で表現するマリーの絵画に共通の感受性を見出すのかもしれない。

そのマリー・ローランサンに捧げられた美術館が日本にあることはよく知られているでしょう。エメラルドグリーンタクシーでおなじみの株式会社グリーンキャブを一代で築いた高野将弘氏は、マリー・ローランサンに魅せられその絵画を収集し、1983年、蓼科高原にマリー・ローランサン美術館を設立しました。その収蔵品にはマリーの代表作が数多く含まれ、マリー・ローランサン作品のコレクションとしては世界第一級の質・量を誇ります。作品収集・研究の拠点という意味でも、日本はマリー・ローランサンにとっての特別な場所となっているのです。

21 世紀に受け継がれるマリー・ローランサンの世界

1970年代から80年代にかけての日本で、マリー・ローランサンは熱狂的な支持を得ましたが、1990年代以降、その人気はやや沈静化したように見えます。いわゆる「泰西名画」＝フランス近代美術が人気を博した時代は終わり、今日では美術館や展覧会は多様化して、ルネサンス絵画や日本美術、現代アートまでさまざまな作品が紹介されるようになりました。また女性の社会参加が進む中で、「女性らしさ」よりも強さや個性が際立つアーティストが求められ、注目されています。

けれども、マリー・ローランサンは今なお、静かな人気に支えられています。たとえば詩やエッセイ、クラフト作品などを好み、懐かしさや繊細さを大切にする人々にマリーは受け入れられているようです。あるいは幻想的な光景を描きながらも、その奥底に孤独や痛みを秘めたマリーの作品に、人々は共感し、癒しを感じるのかもしれない。

マリー・ローランサンの人生を知るとき、作品世界への理解は一層深まります。展覧会カタログではマリー自身による詩とエッセイ、『扇』所収の詩をはじめ、恋人アポリネールやピカソの愛人フェルナンド・オリヴィエ、堀口大學などマリーと親しく関わった人々の証言をご紹介します。また、辛口のエッセイで知られる**辛酸なめ子氏が現代の女性の視点からマリー・ローランサンを分析したエッセイ**を掲載いたします。



《猫と女あるいは娼婦のプリンセス》1920年
油彩、カンヴァス 81.6x48.9cm